

# アクション・リサーチ — 日本語教師の自己成長のために —

広島大学教育学部助教授 横溝紳一郎

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマはアクション・リサーチ（日本語教師の自己成長のために）です。

## (1) アクション・リサーチとは？

アクション・リサーチ (action research、以下AR) は、ひと言で言うと、「現職教師が自己成長を目指して行う自分サイズの調査研究」です。つまり「教師が自己成長のために自ら行動 (action) を計画して実施し、その行動の結果を観察して、その結果に基づいて内省 (reflection) するリサーチ」ということになります。自分の教え方の向上を目指して内省プロセスに従事するのは、自己成長を望む教師なら誰でも通常行っていることですが、ARにはそれに枠組みを与え、それをよりシステマティックに変化させる機能があります。

## (2) なぜ実施するのか？

ARを実施するメリットとしては、(1)教師自身の成長、(2)教師一人一人が、教え方についての既成の理論を受け入れるだけの「消費者」ではなく、「教え方に関する情報の発信基地」になれる、(3)教師同士のネットワーク作りに貢献する、(4)周りの人々そして社会の、教師の仕事に対する理解が深まる、(5)教授・学習環境が向上する、(6)教師と学習者の間の信頼感・親密性が増すこと、等が挙げられます。

## (3) どのように実施するのか？

ARは自分の教授活動の中での問題点や関心事 (concerns) をトピックとして、そのトピックの何が気になっているのかをできるだけ具体的に明らかにするところから始まります。ARでリサーチするトピックは、教師が教えること・学習者が学ぶことに関するものであれば、何でも構いません。例えば、「指名の仕方」「発音指導の仕方」「クラスルーム運営」「成績不良の学生への対処」「ほめ方」「誤りの直し方」「教室活動の工夫」「質問の内容」「学習者の動機づけ」「自律学習の援助法」など、教師が関心・興味を持ったものなら何でも、ARでリサーチするトピックになります。

トピックがはっきりしたら、そのトピックについてク

ラスの中で実際に何が起きているのかを調べると共に、そのトピックに関してどのような主張が既になされているのかについての情報をできるだけ集めます。このようなクラス内の調査と先行研究の調査によって得た知識を元に、問題の改善策や関心事の実施方法を考え、それを実行に移す計画を細かく立てて、実際に実施します。実施した行動の成果を観察・分析し、行動の成果が望ましいものであったかどうかを評価し、望ましいものでなかった場合は、その原因を考察します。この結果、更なる改善策を考えてそれにトライすることも可能です。リサーチが一段落ついたら、そのプロセスと結果を他の教師と共有します。

## (4) 特徴

### ・状況密着型である（小規模であることが多い）

ARの対象は基本的に、教師が実際に教えている教室そして学習者です。必然的に、教師が教える状況に密着した小規模のリサーチになる傾向があります。

### ・（授業を行っている）本人が行うものである

ARを実際に行うのは、実際に授業を担当している教師本人です。他の人の助けを得たとしても、その主体はあくまで教師自身でなければなりません。いわゆる研究者がAR実践者を援助する際は、一方的に指導したり講評したりすることは避けなければなりません。

### ・協働的 (collaborative) 実施が望ましい

一人でARを進めることも不可能ではありませんが、他の教師と協力して励まし合いながら進める方が実施が容易です。協働でリサーチを進める中で、他の教師との横のつながりを広げることにも可能になります。

### ・起こした変化によって他の人が影響を受けるものである

ARは、教える状況の向上を目指して教師が行動するものです。その行動によって影響を受けるのは行動する教師本人だけにとどまらず、学習者や他の教師や教育機関等に直接的/間接的に影響を与えることになります。そういった意味でARは、ポリティカル (politi-

cal)なプロセスです。

- ・ **自分の教室を超えた一般化を直接的に目指すものではない**

ARは、教師が自分自身の教える状況の向上を目指し状況密着型で行うものであって、その結果の一般化は慎まなければなりません。

- ・ **柔軟性があり取り組みやすく現場の教師向きである**

ARは、あくまで教師の実践の向上を目指して行われるものであって、教師の通常の仕事スケジュールを崩して無理に実施してかえって実践の質が低下してしまつては本末転倒です。ARは、現場で授業を担当している教師が取り組みやすい柔軟さを持っています。また、ある仮説を立てたとしても、それにこだわらず、必要に応じて仮説を変化させていくという点でも柔軟です。実施方法についても、変更の必要性や変更したいという気持ちが出てきた場合は躊躇なくそれを変更し、新たな方法論を明示し直し、その後はそれに沿って研究が進んでいきます。

## (5)アクション・リサーチに関する提言

上述のARの実施によりもたらされるメリットを出来るだけ実現するためには、以下のような心構えが必要です。

- ・ **ARの始まりはトップダウンではなく、ボトムアップであるべきである**

ARの実施の決定は、本人が「自分自身の現状を変えること」を望んで始めるというボトムアップ形式でなければなりません。教育機関等が教師に無理に実施させるトップダウン形式であってはなりません。また、リサーチのトピックも実施者本人から出てくるものでなければなりません。

- ・ **自分サイズのリサーチでなければならない**

ARを実施できる環境は、実施者によって大きく異なります。規模・長さ・データの豊富さ・データ分析の綿密さ等の面で「自分にとって大き過ぎる負担にならない」ARの計画を立てて、それを実行に移すことが肝要で、それにより、それぞれの形での自己成長が可能になります。

- ・ **深い内省が必要不可欠である**

内省の部分をあまり重要視せず、行動に移すことそしてその結果を知ることのみに重点を置いたARが、現状では残念ながら少なくありません。この内省の不足・欠落は、ARの後退であり、教師としての成長への貢献度が著しく減少してしまいます。

- ・ **その過程と結果の公開にあたっては、特別なスタンスが要求される**

ARの公開者には、客観的な態度による陳述ではなくて、実施課程で自分が何をを行い、考え、思い、感じ、

どのような形で成長したのかを、自分の言葉で正直に分かりやすく「一人称で事実に忠実に」伝えていくことが、要求されます。そして、報告を聴いたり読んだりする側には、そのトピックについての自分の体験やアイデア等を公開者に伝え、積極的にインターアクションを創り上げ、公開者の自己成長を共有・支援する姿勢が必要とされます。

- ・ **実証主義的な実験研究と棲み分け的な共存を図るべきである**

様々な研究者によって広く行われてきた実証主義 (positivist) 的な授業の実験研究は、ある理論に基づき仮説 (hypothesis) を設定し、変数 (variables) をコントロールした実験によってその仮説を検証し、どの教室にも応用可能な「1つの真理」を追及することが、その目的です。ARはこれとは異なる目的、すなわち「教室内外の問題および関心事についての、教師の理解の深まりと教育的実践の改善」、そしてその結果生じる「教師の自己成長」を目的として実施されるものです。目的が異なるのですから、その機能も方法論も必然的に、実証主義的な実験研究とは異なるものになります。このタイプの違う2つのリサーチは、お互いを否定し合うのではなく、それぞれの良さを活かす形で、棲み分け的な共存を目指すべきです。

## (6)アクション・リサーチの可能性

これからの日本語教師に求められるのは、ある「どのように教えるか」のモデルを、情報や知識として知ることから出発して、そのやり方をどのような条件の場合にどのような原則や認識に基づいて採用すべきなのかを、自分の教室の現状の的確な把握に基づいて考えていける能力です。ますます多様化していく学習者に対応して効果的な授業を行うためには、教師自身が自分の形で成長していくことが必要不可欠です。ARはその実現へ向けての大きな力になります。また、実施したARの公開を通じて、教育現場の声を日本語教育の発展のために反映させていくことも可能です。ARはこのように、日本語教師の一人一人の自己成長に一つの枠組みを与え、日本語教育全体の発展に貢献する大きな可能性を秘めています。

## 基本的な参考文献

- 横溝紳一郎 (2000) 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』 日本語教育学会編 凡人社  
 Burns, A. (1999) Collaborative action research for English language teachers. New York: Cambridge University Press.  
 Crookes, G. (1993) Action research for second language teachers: Going beyond teacher research. Applied Linguistics, 14( 2 ), 130 - 144.